女子大学生のファッション行動と生活意識の関連性

横浜国立大学　教育人間科学部　学校教育課程
鈴木　実穂
（指導者　薩本　弥生）

1.　研究目的

被服の社会・文化的な役割には、社会的地位の呈示や個性の表現などの、他者に何らかの情報を伝達するノンバーバル・コミュニケーションの媒体としての側面がある。本研究では生活意識と着装行動、さらに具体的な着装イメージとの関連に着目し、日常でどのような意識を持って過ごしているかという生活意識と、視覚的な着装イメージを用いた印象評価、および場面ごとの着装意識との関係性が、視覚的イメージの選択にも影響を及ぼすかを検討した。

2.　研究方法

調査対象者：横浜国立大学学生（以下、国大生と記す）165名（男性70名、女性92名、欠損値3）、
文化女子大学学生（以下、文女生と記す）247名（女性246名、欠損値1）、計412名
調査時期：2003年11月～12月上旬
調査方法：質問紙によるアンケート調査（集合法）
調査内容：調査にあたっては次の4つの項目について尋ねた。①　生活意識要因に関する質問項目、
②　視覚的な着装イメージ（着装シミュレーションソフトを用いて作成）に対するイメージ評価、
③　②の試料を用いた、場面ごとにふさわしい着装イメージの選択、④着装行動における意識
分析方法：①　項目をファッション関心度・学生生活充実度・将来観・異性観の観点から分類して集計した。②　6種の着装イメージに対して11の形容詞対を用いて印象評価をしてもらい、形容詞ごとの因子分析を行った。③　場面ごとに選ばれた服の頻度を集計し、分析に用いた。④　着装の際の意識を自分らしさ・活動しやすさ・女性らしさの3点についてどの程度重視するかを訊き、生活意識等との関連を調べた。①～④それぞれの項目の学校・性別間の関連を調べ、さらに生活意識・着装意識と③における着装イメージの選択頻度との関連についても検討した。

3.　結果と考察

①　生活意識の関心度について調べるため、項目をファッション関心度・学生生活充実度・将来観・異性観の観点から分類して集計したところ、大学間では文女生の方が、性別間では女性のほうが、ファッション関心度が高かった。②　6種の着装イメージを11の形容詞対を用いて評価させ、因子分析を行った結果、4因子に分類できることが明らかとなった。③　着装イメージの選択に関しては、全体を通してはＢの服の頻度が高かった。このＢの服とは着装イメージの印象評価においてあまりどのイメージも強くなく、最も中性的と判断された服であった。生活意識や基本属性間での比較をしたところ、ファッション関心度の高い学生ほど、Ｂの服を選択する傾向が見られ、また、文女生のほうが同じくＢの服を選ぶ頻度が高かった。④　着装意識としては、「自分らしさ」が場面に関係なく最も重視されることが明らかとなった。生活意識間で比較すると、ファッション関心度の高い学生ほど「自分らしさ」を重視する傾向にあることがわかった。また、着装イメージの選択と着装意識との関連を調べると、「自分らしさ」を最も重視する学生の間では、服の個性が強すぎないＢの服が選ばれていることが明らかとなった。このことは、個性の表現を服に依存していない現れと推察された。